

第34回川崎市文化芸術振興会議（摘録）

- 1 会議名 川崎市文化芸術振興会議
- 2 日 時 平成26年7月10日（木）
午前10時00分～12時00分
- 3 場 所 明治安田生命ビル 2階第3会議室
- 4 出席者
 - (1) 委 員 澤井委員（議長）、垣内委員（副議長）、猪口委員、小泉委員、城谷委員、高田委員、野畑委員、林委員、渡辺委員
 - (2) 事務局 市民・子ども局市民文化室
竹花室長、大坪担当課長、石床担当係長、渡邊職員
- 5 議 題
 - (1) 文化アセスメント報告書 提言内容について
- 6 公開・非公開の別 公開
- 7 傍聴者 0名

【審議内容】

事務局 委員過半数の出席により、会議が成立した旨を確認。

議題 1

澤井議長 それでは、議題1の「文化アセスメント報告書 提言内容」について事務局から資料の説明をお願いしたい。

事務局 今回は、平成25年度文化アセスメントのまとめの回ということで、事務局より資料1-1として報告書の叩き台を用意させていただいた。しあわせを呼ぶコンサートの報告書については、前回の会議で一度提示しており、その際いただいた御意見をもとに修正させていただいた内容となっている。芸術のまち・かわさき人材育成事業については、フィールドワーク後にいただいた各委員からの報告や、前回のヒアリングでの御意見等を踏まえて叩き台を作成させていただいたので、内容について御審議いただきたい。

また、資料1-2と1-3は、それぞれの資料の調査・評価シートであり、報告書の基となる、項目ごとの指標や評価、評価の理由等を記載させていただいて

いる。こちらは、公表されるものではなく、あくまで報告書作成のための下資料と捉えていただきたい。

澤井議長 それでは、まずは人材育成事業から内容について審議に入りたい。

私から確認だが、調査・評価シートで達成度や周知度で2がついている項目がいくつかある。これはアート講座はまずまずだが、しんゆりシアターが、達成度としてはもう少しということでも2をつけているということか。

事務局 そのとおりである。特にしんゆりシアターについては、スタートして間がないということも有り、周知度等についてはこれから伸ばしていく事業であると考えている。

林委員 アート講座については、ボランティア育成を主とした講座と一般教養的な講座が混じっているようであるが、どれぐらいの割合になっているのか。

事務局 全12回のうち、1回がボランティアをテーマとしたもの、2回が文化全般をとらえたもの、残りの9回が一般教養的な講座である。事業としては、ボランティア育成と、地域の鑑賞者育成の両方の要素が入ってしまっている面がある。ただ、ボランティア育成だけの講座を組んだときに、果たしてどれだけの方が参加してくれるかという懸念もある。

林委員 しかし、目的がボランティアの育成であるならば、どれだけ人が集まってもボランティアに繋がっていかないのではないか。

澤井議長 質の向上という面では、ボランティア登録された方を対象に、もう一步踏み込んだ講座を用意していると聞いている。ただ、サイトウキネンの青山さんの講座などは、最先端の事例であり、導入としては高度過ぎるようには感じた。あれこそ、ボランティア登録された方への講座とすべき内容ではないか。

高田委員 私は、サイトウキネンの事例は、ボランティアがただ参加するのではなく、企画の中に入り込んで主体的に参加する一つのパターンであると捉えた。そう簡単なものではないと思うが、あの講座を最初に持ってきたということは講座主催者の思いや意気込みが感じられ、良いと思う。

高田委員 話が変わるが、評価シートと報告書のバランスが悪いように感じた。評価書にあるとおり、事業の目的自体は「人材育成」ということではっきりしているかと思う。しかし、一方で、報告書の6頁では「方向性が定まっていない」と記載されている。この事業については、人材を育てるということで方向性は定まっているのではないかと思うが。

澤井議長 方向性は固まっているが、育てたい人材に合致した事業になっているかということかと思う。このあたりは表現を改める必要があるのではないか。

澤井議長 同じく、報告書6頁の「地域劇場しんゆりシアター」の事業目的への評価の部分について、「長期的な展望をもって事業に臨んでもらいたい。」とあるが、同じ内容が提言にも記載されている。この記載は、評価からは削るべきではないか。

次に、市民との関わりについての評価部分だが、「若い世代を対象にした構成

や周知方法等も検討していくべきであろう」とあるが、これも提言に記載する内容ではないか。ここは現状の課題を記載すべき部分である。

小泉委員 報告書の内容だが、しんゆりシアターについては市民劇団の「劇団わがまち」についての記載に偏っているのではないか。プロによる2公演もこの事業の一つであるし、鑑賞者の育成や裾野拡大という面では効果があったのではないか。

澤井議長 評価シートにもプロによる2公演は高い集客力を誇っているとある。こういった内容を報告書に記載してはどうか。

垣内副議長 プロによる公演は買い公演なのか。

事務局 買い公演ではなく、アートセンターが企画し、脚本や演者はプロが行なっている。例えば、ミュージカルについては、実行委員会を構成している昭和音楽大学の横山先生に脚本や演出を依頼し、演者はプロの劇団から派遣してもらっている。

猪口委員 アンケートについて、参加した方へのアンケートは実施されているが、参加していない方へのアンケートも行い、市全体としてこのイベントがどう捉えられているかを知る必要があるのではないか。

事務局 個々の事業の認知度等については、数年に一度、市民アンケート等により主要な文化事業の認知度についてアンケートを行なっているが、この事業自体は新しい事業でもあり、前回行なった調査では項目に入っていなかった。事業単独で、市全体へのアンケートを行なうのは、費用の面からも困難なのではないか。

林委員 ただ、実際は、ぜひやるべきではある。この事業を知っているか知らないか。知っていて来ないのであれば、なぜ来なかったか。こういった調査が非常に大切である。

垣内副議長 以前、インターネットで全国調査を行ったが、約半分の人は自分の家の近くの劇場も知らない。また、知っていても行ったことがある人はさらに少ない。劇場に行く人は1割ぐらいしかおらず、その半分程度がリピーターというのが実際のところであり、劇場の認知度というものは高いものではない。ただ、劇場に限らず、野球やサッカーなど人気があるように見えるものでも、足を運んでいる人は人口のごく一部であり、一概に知られていないから公的な支援に値しないというものではない。

澤井議長 文化室は、フェイスブックやツイッターは活用しているのか。

事務局 ツイッターについては、シティセールスの部門で、文化を含めた市のイベント情報の発信等を行っている。フェイスブックについては、川崎市市民ミュージアムなど、文化施設が行なっているもののほか、今回の劇団わがまちなども、劇団の活動内容の発信にフェイスブックを活用している。

林委員 やはり、不特定多数にどう発信していくかは非常に重要と考える。今後、財政事情が厳しくなっていく中で、文化のように生活に不可欠とまでいえない分野のものについては市民にどれだけ浸透しているかが非常に重要になってくる。例えば、サッカーをいつも見ているわけではない人も、ワールドカップの時期になれば

ば否が応でも目に入ってくる。そういうものが文化にも必要である。劇場に行かなくても知ることができる、目に入るというものが必要。

垣内副議長 行なうのであれば、例えば、アルテリッカのように新百合ヶ丘なら新百合ヶ丘と、地域を絞って行なう必要がある。

高田委員 やはり、わくわくして面白いと思えるかどうかが大重要である。住民としての目線で見ていると、旗は振っているが地域住民がついていっているかという、必ずしもそうではない。今は、(講座が)安いから人が集まる。(公演に)知り合いが出ているから集まる。そうではなく、面白いものを作り、そこに人が集まる、そうした方向を見据えて続けて欲しい。それにより新百合ヶ丘の取り組みが評判になっていけば人も集まってくる。まだまだ、改善の余地はあると思う。

澤井議長 若年層への周知については、具体的なアイデア等あれば、提言に入れられると思うのだが。また、表現の部分であるが、「～と考える」という語尾が多いが、このあたりは、評価書でもあるため、極力「～である」と言い切る形に変えるべきである。

小泉委員 評価書6頁、取組への評価の市民とのかかわりの部分であるが、アート講座について「参加者の多くは中高年であり、若年層の参加がほとんど見られなかったことが残念」とある。個人的には、こうした地域でのボランティアは時間に余裕があり、知識や経験を持っている中高年が担っていけばよいと思っている。若年層は、将来のよき鑑賞者を育てるという方面で対象にしていけばと考える。

澤井議長 若年層の参加がみられないのが残念というよりは、参加が課題の一つであるといった表現のほうがよいのではないか。

垣内副議長 提言の1つ目に、「人材といっても実演者・アートマネージャー・文化ボランティア・鑑賞者など様々な種類の人材が…」と記載されているが、この事業自体、アートマネージャーや実演者といった人材の育成まで求めているものではないのではないか。

事務局 現状、アートマネージャーの育成まではいかない。実演者については、地域劇団の担い手という意味で記載したが、プロの実演者育成というものではない。

澤井議長 どちらかといえば、参加者の育成といったほうが近いのではないか。

高田委員 劇団等に入らず、地域で活動して実演する側としてアートセンター200席を使いたいと思っているような、そうした自分たちで活動を行おうとしている実演者を支援することが地域の活性化に繋がっていくのではないか。実演者という文言を削ることにより、そうした視点が欠けてしまうのは残念に感じる。地域の活性化には、鑑賞する人、企画する人、舞台に立ち実演する人、そうした人がいて活性化に繋がっていくのではないか。

垣内副議長 この事業のターゲットとして、実演者の育成まで含んでいるのか。

事務局 事業の主たるターゲットは、文化ボランティアや鑑賞者の育成である。しかし、実演者という言葉が当てはまるかはわからないが、「しんゆりシアター事業」特

に「劇団わがまち」に関しては、地域の演劇文化を主体的に担って発信していく人材の育成という面も持っている。

林 委 員 総合評価の理由の欄で、「地域劇場しんゆりシアター」の運営費の大部分が公費からの助成が占めており、将来への見通しなど多くの課題があると記載されている。一方で、提言には、この部分についての提言が無いようだが、課題としてあげるならば、それに対する提言は必要ではないか。

事 務 局 抜本的に解決できるような具体的なものが出てこなかった。そのため、提言3つ目の市内での巡回公演等による裾野の拡大や、4つ目の地域のイベント等との連携による認知度の向上などを通して観客数などの増加に繋げて行くことが改善していくための道筋に繋がっていくのではないかと考えている。

林 委 員 であれば、そうした表現を付け加えてはどうか。

垣内副議長 「そうした取組により、財政基盤を強化する」などでどうか。

事 務 局 そのように改める。

林 委 員 アンケートについてであるが、この事業でもアンケートを行なっているが、事業に参加して良かったかどうかといった項目が主である。しかし、次の改善や事業構成に繋げて行くには、例えば「参加してあなたの何が変わったか、何に対する理解や考えが深まったか」などインパクトを問う内容が必要である。ただ楽しかったかどうかというアンケートでは、行政目的に合致しているかなど事業としての効果が測定できない。

城 谷 委 員 この事業は国からの助成が無くなったらどうなるのか。

事 務 局 指定管理者の事業でもあり、継続していく。

高 田 委 員 ただ、いつまでも行政からの金銭に頼るのではなく、将来的にはある程度自立していけるような形を見据えてやっていってほしい。

渡 辺 委 員 助成金があるうちは元気に活動できるが、消えたらしぼんでしまうというのは、本来の劇団運営ではないように思う。やりたいことを掲げて、身銭を切る覚悟で活動してといった形が本来の姿。それを継続するには市民の応援が不可欠であり、どれだけ市民と一緒にやれるかが大事。

林 委 員 今の助成金は、事業の実施への助成に寄り過ぎている。そのため、助成が切れるとともに終わってしまう事業が非常に多い。そうではなく、運営機能にも助成を入れ、ある程度機能強化していかなければ、継続的な事業とならない。

垣内副議長 最近では、文化庁の補助もそうした方向性に変わりつつある。

林 委 員 市民から、やりたいという動きがあって、そこに助成するのが本来の姿ではないかと思うのだが。

渡 辺 委 員 それでも、長い間続けると、音楽のまちのように、じわじわと浸透してくるものもある。

城 谷 委 員 行政の援助は非常に大切。ただ、行政が何もかもでは、あつというまに潰れてしまう。自分たちで汗をかくような仕組みにしなければ。

と、事業自体が尻すぼみになってしまう可能性はある。

小泉委員 提言に事業自体を継続していくことが大事だと書いてあれば、予算を確保する際の応援にもなるのではないかと。

澤井議長 この事業と、先ほどの人材育成事業の総合評価（A継続、B改善、C見直し）についてまだ議論していなかったが、これについてはどうか。

城谷委員 しあわせを呼ぶコンサートについてはAでも良いのではないかと。

澤井議長 改善の余地があれば、基本的にはBをつけている。過去、Aをつけたのはこどものための音楽推進事業だけである。ほとんど非のうちどころが無い事業で無いと、過去Aをつけてこなかった。

林委員 この事業は、特定のNPO法人が行っていたものを川崎市が支援し始めたということか。

事務局 障がい者の方から、第九を原語で歌いたいという声があがり、NPO法人が呼応して始まった。そうした地域の動きを受け、行政の協力が始まった。

林委員 資金面は全て行政のようだが、障がい者に対する応援という意味で入場料をとるといったことはないのか。

垣内副議長 キャンパという形ならまだしも、入場料を導入すれば入場者数は落ちる。

事務局 障がい者と市民との相互理解が事業目的の一つでもあり、一人でも多くの方に来ていただくためにも入場料の徴収は考えていないと聞いている。

垣内副議長 評価シートに、非常に安価な費用であるとあるが、果たして安価なのであろうか。ゲストへの報酬はもっと費用を抑えることが可能ではないかと思う。少なくとも「非常に」はとるべき。

事務局 例えば日本フィルのソロコンサートマスターが出ているが、通常は1人で数十万から人によっては百万円を越える。そうした部分を考えると、高額とまではいえないのではないかと。

城谷委員 通常よりは少し安いようだが、「非常に」とまではいかないのではないかと。

垣内副議長 公益的な活動に対して協力してくれる支持オーケストラなどが出来てくれば。

林委員 そうしたところと、マッチングしていくことが行政の役割として重要。

澤井議長 この事業の評価はどうするか。人材育成事業はB改善で異論は無いかと思う。

背中を押してあげるという意味をこめてAをつけるのか、改善面もあるということとBとするのか。

高田委員 この事業は、何回目の事業か。

事務局 14～5年続いている事業である。

澤井議長 行政評価ではないので、多少の落ち度があったから点数を落とすのではなく、トータルで見て考えるものであると、子どものための音楽推進事業ほどの洗練度は無いがAということもあるかと。文化芸術の福祉分野との連携という意味では先進的なものであるとも思う。

高田委員 （基礎となる評価シートで）独創性なども4段階の3がついているが、個人的

にはこのあたりも4をつけて良いのではないかと思います。

澤井議長　この項目には、文化芸術性という側面も含まれるので。このあたりは、野畑委員はどうお考えか。

野畑委員　二部の運営がちょっと…。アンケートなどで、一部、二部どちらを目的に来たかなどをとれば、今後の構成等の考え方の参考になる。

澤井議長　では、評価書の内容については、事務局と私で修文をさせていただく。しあわせを呼ぶコンサートについては、後押しをしてあげたい部分もあるが、皆さんから出ているように二部の運営や指導体制の強化など改善の余地もあるかと思う。無条件でOKともいえない面もあるため、Bでいかがか。

城谷委員　了解した。

澤井議長　事務局と修文したものを後日、送付させていただき、表現等で何かあったら、御意見をいただくという形にしたい。

以上で今日の議題を終わりたい。

(会議終了)